「空欄ソクラテス」

作　ササキタツオ

《登場人物》
メイコ（１８）高校３年生　亀さん
アヤ（１８）高校３年生　兎さん

《本編》

＃１　面倒な彼女たち

○教室の片隅　初夏の朝

アヤ（１８）が席で本を読んでいる。

メイコ（１８）がやってきて、アヤの周りをグルグルと回る。

メイコ「アヤ。生きるって何だろ？」

アヤ、メイコを無視する。

メイコ「生きる。私たちは生きている。なんで生きてる？　どうしてだろ？　息をする。息を止める。苦しい。息を吸う。やっぱり、生きてる。実感する……（深いため息をつく）」

アヤ「なんなの？　重い」

メイコ「息吸うのがメンドイって話」

アヤ「は？」

メイコ「生きるの、メンドイー」

アヤ「は？」

メイコ、アヤの周りを回る。

メイコ「あーあーあー」

アヤ、呆れる。

メイコ、だんだん目が回って来る。

アヤ「座ったら？」
メイコ「うん……」
メイコ、アヤの向かいの席に座る。
呼吸を整えるメイコ。
メイコ「ふー」
呆れているアヤ。
アヤ「落ち着いたか？」
メイコ「んー。まー」
アヤ「現実に戻って来たか？」
メイコ「微妙―」
アヤ「戻って来い」
メイコ「いやでもさ。生きるの、メンドイって話だよ」
アヤ「どういう話だよ。メイコ、どうした？」
メイコ「メンドイの」
アヤ「いや。めんどくはないだろ」
メイコ「めんどくあるよー」
アヤ「いや。ない」
メイコ「ある」
アヤ「ない」

メイコ「あるの」
アヤ「何があるって？」
メイコ「だから、メンドイじゃんかよー。朝起きて、起き上がって、顔洗って、仕度して、学校きて、授業寝て、部活引退したから、帰って、スマホ見て、ラインして、眠くなって、寝る。これが面倒以外の何がある？　あと息を吸うのもメンドイ」
アヤ「んー、だったら、息止めて、勉強しろ、受験生」
メイコ「えーっ……」
アヤ「勉強あるのみ」
メイコ「ってか、そんなの生きるうちに入らなくない？　勉強なんてつまんないし。メンドイだけだよ」
アヤ「なんでもそれで片づけない。勉強がいまの我々の目的だろ？」
メイコ「受験ねー」
アヤ「受験生。将来考えて、進路決めて。そうでしょ？」
メイコ「将来なんてわかんないし。進路決まらないし。考えるのもメンドイ」
アヤ「いや。いやいやいや」
メイコ「アヤー助けて」
アヤ「無理」
　読書に戻る、アヤ。

アヤの本をとるメイコ。
アヤ「ちょ！」
メイコ「なにーなにー？」
アヤ「返せ」
メイコ「（本を見て）ほー。ソクラテスの弁明？」
アヤ「返せ」
メイコ「アヤ。どした？」
アヤ「……ワレ、哲学に目覚めん的な」
メイコ「これ、倫理で、習ったヤツ」
アヤ「ギリシャ哲学。ってか、返せ」
メイコ「えー」
アヤ「今いいところなんだよ」
メイコ「興味あんの？」
アヤ「悪い？」
メイコ「生きるとか、死ぬとか。哲学とか」
アヤ「悪い？」
メイコ「興味ないふりして、興味ある系？」
アヤ「いいから、返せー」
メイコ、しぶしぶアヤに本を返す。

メイコ「はい」
アヤ「よろしい」
メイコ「いやー。でも、アヤも仲間だったとはね。生きるのメンドイ気持ちわかるよね？」
アヤ「一緒にするな」
メイコ「えー」
アヤ「ソクラテスはさ、自分の主義を証明するために、死刑を受け入れて毒飲んで死ぬんだよ」
メイコ「マジ？」
アヤ「自分の主義は曲げない。そんな哲学者。正確には、主義を曲げたくないから死を選ぶ、のかな。理想の証明……」
メイコ「単にわがままジジイなんじゃないの？」
アヤ「メイコ……」
メイコ「だってさ、人間、死にたくなんてなくね？」
アヤ「さっき、生きるのメンドイって言ってなかった？」
メイコ「生きるのはメンドイよ。でも、死ぬのは怖い。息を吸うのは面倒だけど。息を止めるのは苦しすぎる。だから私はハザマを漂うの」
アヤ「なんだそりゃ」
メイコ「考える。死ぬことを考える。考えると怖い。でも頭をよぎる。チラ

チラよぎる。だから、メンドイ。忘れたくても急に胸の中に思い出される。
死ぬこと。私は怖い」
アヤ「もはやそれは考えぬくしかないんじゃない？」
メイコ「考えぬいたら。この状態よくなるかな！？」
アヤ「考えないよりマシじゃないの？」
メイコ「そうなのかな……。ってか、なんで、ソクラテスは弁明してるの？」
アヤ「ん？　ソクラテスは自分が一番賢いってことに気づいちゃったんだよ」
メイコ「え。調子乗ってる」
アヤ「いわゆる【無知の知】というやつですね」
メイコ「無知の知？」
アヤ「アイツよりも私は物事を知らない、ということを私は知っている、その点において、アイツよりも私の方が賢い、優れている。ということだよ」
メイコ「へリクツ」
アヤ「まー。知らないことはいっぱいあるから傲慢になってはいけない、ということだろうか」
メイコ「へリクツ、ヘンクツ、オダブツか」
アヤ「オダブツって……。とにかく色々あって裁判にかけられたソクラテスは、弁明するのも嫌になって、毒飲んで死ぬの」
メイコ「残酷だ」

アヤ「死をもって、自分の思想を貫いたわけよ。いやー昔の人はすごい根性だよね」
メイコ「でも、死んだらオシマイじゃん」
アヤ「弟子たちに囲まれて、ある意味幸せな最期だったのかもよ」
メイコ「あー。生きるのメンドイけど。その話聞いたら、私はまだ死にたくはないのかもな。自分の思想とかよくわかんないけど」
アヤ「生きようぜ」
メイコ「でもね、死にたくはないけど、生きたくもない、そんな人間はどうしたらいいの？」
アヤ「は？」
メイコ「人間はフクザツな生き物、グレー・オブ・ヒューマンって話」
アヤ「メイコのは、ただのワガママ・オブ・ワガママでしょ」
アヤ、荷物を持って、立ち上がる。
メイコ「アヤー行っちゃうの？」
アヤ「塾あるから。受験生」
メイコ「さびしいー」
アヤ「メイコも。面倒とか言ってないで。そろそろ進路、真面目に考えた方がいいよ」
メイコ「アヤーヤダー」

アヤ「じゃあな！」
アヤ、手を振って、去る。
メイコ、思いっきり深呼吸して、息を止めて、机に突っ伏す。
やがて、我慢の限界がきて、大きく息を吐いて、吸う。
メイコ「あー。死ぬかと思った！」

#2　人生１００年時代
○教室の片隅　夏の終わりの放課後
セミの鳴き声が微かに響く。
アヤの席で本を読んでいるメイコ。
やってくる、アヤ。
アヤ「おおおっ？　メイコ？　どした？」
メイコ「おーす」
アヤ「おーす」
メイコ「いま、いいとこ」
アヤ「それ、私の、本？」
メイコ「ソクラテス、めっちゃ追い詰められてる、ウケる」
アヤ「そこ面白がるところかよ……」
メイコ「面白いから読んでるんじゃんー」

アヤ「そっか。実は、私は……そこまでじゃなかったな」
メイコ「え？　面白くなかったの？」
アヤ「まあ。そうだけど。弁明ってさ、言い訳みたいで、なんか嫌だなって」
メイコ「ソクラテスの言い訳。ってタイトルだったら、バズったかもね」
アヤ「それは言えてる」
メイコ「よく考えたら、全編、言い訳かー。ヘリクツ、ヘンクツ、オダブツだもんな」
アヤ「まあ、言い訳って捉えることもできるって、話」
メイコ「皆に責められて。ちょっと可哀想な気もするけどね。自分の意思を曲げないとか、ワガママって感じもあるけどさ」
アヤ、メイコの隣の席に座る。
ため息をつく、アヤ。
メイコ「どした？」
アヤ「生きたくないけど、死にたくもない。そんな複雑な心理をお持ちのメイコさんは、今後、どうするんですか？」
メイコ「急に何？」
アヤ「今後。今後の私たちですよ」
メイコ「それは。未定の未確定で」
アヤ「進路、決めないの？」

メイコ「うん、まだね」
アヤ「のんきだなあ」
メイコ「あ、進路相談、どうだった？」
アヤ「疲れた。なんか、先生と話しても先が見えないっていうか。理想と現実。突きつけられるよね」
メイコ「それはそうかもね」
アヤ「高３って残酷だよ。青春の中で最高に最悪の季節だよな」
メイコ「まー。アヤならなんとかなるっしょ。希望の大学行けるよ」
アヤ「それが能天気だっていうの。私は全然努力が足りてない」
メイコ「アヤ。努力してるじゃん。考えすぎなんだよ。そのまま進めばいいんじゃない？　今ダメでも、受験する時に実力が届けばいいんだからさー」
アヤ「でもさ。なんで大学進むのか、進みたいのか、最近よくわかんないんだよね」
メイコ「私はいつもよくわかんないよ」
アヤ「深刻な話。私たち、そのうち、消えちゃうんだよ？」
メイコ「ん？」
アヤ「いや。だから、消えちゃうじゃん」
メイコ「それはそうだけど。急にどうした？」
アヤ「だから消えちゃう」

メイコ「それはそうだけど。この前と１８０度違くない？　この前は、さんざん私の事、バカにしてたのに」
アヤ「人間は必ず、死ぬじゃん。死んだら、跡形もなくなるワケじゃん。虚無ですよ。虚無。粉々まっさらさらになるわけですよ」
メイコ「まー。そうかもね」
アヤ「歴史とか見てもさ、結局、神様とかあの世とか、慰めみたいな希望の類を発明してみても、結局、人間はいまだに死を乗り越えられていないわけで。だから、ダラダラしている時間は私たちにはない。何かをなすには人生は短い」
メイコ「えー。そこは、ダラダラしようよ。暑いしー。それだけで思考は限界だよ」
アヤ「暑いのは認める。死にそう。でも、ダラダラはよくない。夏も終わる。もう時間を浪費する季節は終わりなんだよ」
メイコ「そんないきなり生きるの急がなくてもいいんじゃない？」
アヤ「私、勉強だけがトリエなのに。全然、受験勉強に身が入らないの。なんのために勉強するのか。いい大学行ったから何？　就職に有利だから？　そんなことのために勉強しているの？　なんか意味わかんない」
メイコ「アヤ。考えすぎ」
アヤ「考えないとダメでしょ？　勉強する意味。私たち、何のために受験す

るのか」
メイコ「受験の目的？」
アヤ「そうそう」
メイコ「んー。アヤのそれってさ、生まれてきたからには死ぬまでに何かしないと！　みたいなことなんじゃないの？　そんな発想メンドイだけだよおー」
アヤ「生きる意味。生きる目的は必要だよ。ソクラテスは、立派に生きた。自分の思想を残したじゃん。私も、立派に生きたい。自分の生きざま残したい」
メイコ「それ、自分にプレッシャー」
アヤ「……」
メイコ「まあ。生きているから考えられる。死んじゃったら何も考えられない。考えられるって事自体、素晴らしいことなのかも」
アヤ「メイコにしては、いいことを言う」
メイコ「本、読んだからね。ソクラテス」
アヤ「でも、能天気に過ごしている時間はもうない。人生は短い。女子高生もラスト半年を切りました」
メイコ「その事実は思いやられる」
アヤ「私、迷ってる……」

メイコ「進路？」
アヤ「親は、就職考えて、経済学部に行けっていうけど。私は、本当は、歴史か哲学勉強したい」
メイコ「おお。そおなんだ……」
アヤ「私、どうせ勉強するなら、人間の存在意義をもっと追求したいの」
メイコ「アヤなら、そういう研究とか向いてると思うよ。突き詰めるタイプだし」
アヤ「メイコだって」
メイコ「え？　私は全然ダメだらけの人間だから。今日の進路相談も白紙で提出した」
アヤ「能天気もいいけど。みんなから遅れちゃうよ」
メイコ「でもね。焦りはないんだ」
アヤ「なんで？」
メイコ「だって、遅れてもよくね？」
アヤ「え？」
メイコ「うちの親も進路は真剣に考えなさいって言うけど。焦るなとも言うよ。人生焦ってもいいことないよーって。一歩引いた目線も大事だよ。ウサギと亀なら私は亀のタイプだから。最終的に、亀ダッシュでごぼう抜きする予定」

アヤ「いや、親はそう言っても、焦ろうよ。もう夏の終わりだよ？　のろのろ亀さんだって、そろそろエンジンかける時期だよ」
メイコ「人生１００年時代。走り出すにはまだ早いな」
アヤ「飛躍しすぎ。いまは夏の終わりって話だよ。現実、日本社会における高校時代の終わりが近づいているわけで」
メイコ「んーじゃあ、最後の夏だから、じっくり味わう！」
アヤ「青春は一瞬だよ？」
メイコ「もー。だから、ダラダラ過ごそ。この暑さ。まどろみの中に漂ってたい。ダラダラっと」
アヤ「ダラダラはできない。人生１００年時代でも、私たちは一瞬の存在なんだから」
メイコ「ウチラはウチラ」
アヤ「え……？」
メイコ「１０年、２０年、３０年。……８０、９０になっても。ヨボヨボになっても。ずっと私たちだよ」
アヤ「また、なんかいいこと言ってるような」
メイコ「そうかも！」
アヤ「(溜息をついて)受験を乗り越えたら、少しは生きやすくなるのかな」
メイコ「人生山あり谷あり。人生１００年時代だから」

アヤ「メイコ。最後まで、私たち、友達でいような」
メイコ「もちろん」
アヤ、メイコ、お互いを見て、微笑む。

＃3　過ぎていく季節
○教室の片隅　秋の終わり（夕刻）
チャイムの音が響く。
並んで勉強している、メイコとアヤ。
メイコ「どおー？」
アヤ「うーん……（と勉強を続ける）」
メイコ「どーおー？」
アヤ「そーねー（と勉強を続ける）」
メイコ「あー。タイクツ！」
メイコ、アヤの赤本を取る。
アヤ「メイコ」
メイコ「うわ難し。無理ゲー」
メイコ、赤本をアヤに返す。
アヤ「聞きたいことあるなら、聞いて」
メイコ「んー。それって勉強に限る？」

アヤ「限る」
メイコ「限らないなら？」
アヤ「だから、限る。今は勉強の時間。私語厳禁」
メイコ「だってさー。これ、問題解いて、意味あるのかなって」
アヤ「は？」
メイコ「何になるのかな？　意味不明じゃいない？」
アヤ「その発言が意味不明」
メイコ「私たち、いつかは死ぬんだよ」
アヤ「また始まった」
メイコ「またじゃない。いつも思ってる」
アヤ「まだ死なない」
メイコ「でもでも。そんなに遠くない未来に消えてなくなる」
アヤ「近くは、ないだろ」
メイコ「とにかく消えてなくなる。まっさらさらになる」
アヤ「それはそう」
メイコ「でしょ？」
アヤ「そうだよ」
メイコ「それなのに。何やってるんだろう」
アヤ「え？」

メイコ「最近よく眠れないし」
アヤ「いつも勉強会で寝てるじゃん」
メイコ「それとは違うの。なんかみんな先に行って、みんなにおいてかれて、私だけ一人ぼっちになって、孤独だなって気づいて、目が覚めるんだよね。で、あっ、そうか、受験なんだって思い出す」
アヤ「焦ってないんじゃなかった？」
メイコ「深層心理はわからんものだよね」
アヤ「気にし過ぎじゃない？　ってか、メイコってもっと鈍感だと思ってた」
メイコ「ひどー」
アヤ「だって、いつも周り気にせずグダグダしてるじゃんか」
メイコ「夏までは、ね。もう秋の終わりだから。いよいよ本番近くなってきて、教室のピリついた空気を感じて。ああ、勝負間近なんだなって思うわけだよ」
アヤ「でも進路」
メイコ「相変わらず、未定ですね」
アヤ「それが問題なんじゃないの？　メイコも目標を見つければいいんだよ」
メイコ「大学なあ」
アヤ「いい加減、決めないと、赤本。過去問対策もそろそろしないと」
メイコ「うーん……アヤはホント優秀だよな」

アヤ「ま。行けるところ行くって手もあるけどね。私は、行きたいところに行きたいから」
メイコ「行かないという手もあるよね」
アヤ「それはな」
メイコ「あーどうしよかなあー」
アヤ「私は、限界試したい」
メイコ「アヤはいいよ。やりたいことあるんだもん」
アヤ「まー。親もようやく折れたしね」
メイコ「いいよなあ」
アヤ「メイコは？　見つからないの？」
メイコ「見つからない」
アヤ「探してないだけじゃない？」
メイコ「んー」
アヤ「じゃあ、メイコの好きなことは？」
メイコ「えー。寝ること」
アヤ「いやいや」
メイコ「バドミントン、かな」
アヤ「それは部活だろ」
メイコ「私って何が好きなんだろ？」

アヤ「それ、聞かれても困る」
メイコ「私は何がしたいんだ？　大学案内見ても、ピンとこないんだよね。
　でも、皆行くっていうし、とりあえず、一人ぼっちになるのは嫌だから、
　なんとなく勉強しているけど……」
アヤ「人生は何かをするには短すぎる」
メイコ「え？」
アヤ「ソクラテスは結局自分では何もできなかった。弟子のプラトンが偉い
　んだよ。師匠のことを書き残したから」
メイコ「ああ……。でもさ、弁明の中で、ソクラテスはさ、自分貫いたじゃ
　ん。それはそれでカッコいい」
アヤ「ならメイコも自分貫いたらいいよ。周り気にしすぎて、流されて、見
　えなくなってるだけじゃない？」
メイコ「私のやりたいこと……？」
アヤ「私は、世界史勉強して、もっと歴史勉強したいって思うようになった
　よ。世界の広さを知って自分がわかる気がした。勉強してみて、気づくこ
　とだっていっぱいある」
メイコ「わがままに生きた方が、いいのかな？」
アヤ「私たちには、時間はあるようだけど、現実は待ってくれないからね」
メイコ「私のやりたいこと……なんだろ」

考え込むメイコ。
勉強を再開するアヤ。
時間が流れる。

＃4　空欄
○教室の片隅　受験の冬　灰色の夕暮れ
メイコ、教室を回る。
メイコ「何もない」
机にタッチ。
メイコ「何もない」
次の机にタッチ。
メイコ「何もない」
次の机にタッチ。
アヤがやってくる。
メイコ「誰もいない」
アヤ「誰もいないね」
メイコ「すっかり受験シーズンだもんね。みんな戦闘中か」
アヤ「そうだね」
メイコ「あー。絶望だ」

アヤ「どうした？」
メイコ「ここはどこ？　私は誰？」
アヤ「勉強しすぎて、ついにおかしくなったか？」
メイコ「いま虚無について考えていたのです」
アヤ「虚無？」
メイコ「この宇宙の始まりと終わり。世界の始まりと終わり。生まれたあと、死んだあと、ウチラはどこからきて、どこへ行くのか」
アヤ「そんなこと今考えなくてもよくね？」
メイコ「いまだから考えるんじゃん」
アヤ「それで、虚無？」
メイコ「うん。歴史とか、古文とか、勉強すると感じる。昔の人の言葉。残っているもの。奇跡だよね。でも残らないものもある。人間の存在は、無に帰ってしまう。儚い。けど、大事にしないと、大切にしないと、何もかも、なくなる。消えていく。あ！　消えるのが怖くて文字って発明されたのかな？」
アヤ「そうかもね。それでいったら、言葉だってそうだよ。話すこともあるけど、語り継ぐってこともある。伝えていく。学んでいくことが大事なのかもね」
メイコ「あ。私、そういうこと勉強したいのかも」

アヤ「は？」
メイコ「今わかった。人間の存在について探求したいのかもしれない」
アヤ「お。まさかの大発見」
メイコ「言葉は残るけど、存在は消える。私たちもいつかは消える。存在は残らない。言葉は残るのか。言葉だって使われなくなったらいつかは消える。はじめからなかったもののように消える。何もかも消えてなくなるのかな？　本当にそうなのかな？」
アヤ「わかんないけど」
メイコ「だよね。だとしたら、考えるってなんだろ……」
　メイコ、窓の外を見る。
　アヤ、メイコのとなりに並ぶ。
アヤ「帰ろうぜ。暗くなる」
メイコ「だね。ってか、私、浪人するわ」
アヤ「は？」
メイコ「今決めた」
アヤ「今決めなくても」
メイコ「いいの。自分の知りたいこと、わからないこと探求すること。もう一回振出しに戻った気分だけど。私、亀だから。いいの」
アヤ「ある意味、メイコらしいな」

メイコとアヤ、去る。

＃５　未来

○教室の片隅　春の始まり

メイコとアヤ、卒業証書を持ってやってくる。

メイコ「人生の終わりだな」

アヤ「いや、ただの卒業だから。むしろここから出発だから」

メイコ「まーそうだが。明日から女子高生は名乗れない」

アヤ「卒業、おめでと」

メイコ「おめでと」

アヤ「あ。でも、メイコは、別にめでたくはない、か」

メイコ「いや、めでたいよ」

アヤ「浪人」

メイコ「まーね。アヤは大学おめでと」

アヤ「ありがと」

メイコ「んわー。これから。もっと人生は複雑でややこしくなるんだろうな

あ。大人になんてなりたくねえー」

アヤ「でも、人生１００年時代。まだ５分の１だからね」

メイコ「わー。もう５分の１か。そう考えると虚しいわー」

アヤ「高校３年間って人生１００年で言うと、わずか３％だけどね！」
メイコ「３％か」
アヤ「３％だ」
メイコ「衝撃。どおりで一瞬なわけだ」
アヤ「一瞬だったね」
メイコ「一瞬だったな」
　メイコとアヤ、教室の窓から外を見る。
　光がさしている。
メイコ「私ようやく見つけた。進路希望調査書の空欄。ソクラテスで埋めた」
アヤ「そっか」
メイコ「亀でのろのろかもしれないけど、私は私の思考を突き詰めていくよ。
　私は私の知らない、未知なるソクラテスに会いに行く。だから、大学へも
　行く。受験勉強は、ホントめんどくさいけど」
アヤ「知らないと言う事を知ったメイコは強いね」
メイコ「そうかな？」
アヤ「私が保証するよ。ソクラテスも顔負けの哲学者になるよ」
メイコ「生きるのは引き続きメンドイけどね」
アヤ「死ぬのだって怖いけどなー」
メイコ「そして、時間は無情にも流れてくね」

アヤ「時間は止まらないからねー」
メイコ「怖いけど。私たちは進んでいくのかね」
アヤ「そうだね」
メイコ「あ。残りの５分の４の人生もヨロシク」
アヤ「こちらこそ」
メイコとアヤ、去る。
教室。
誰もいなくなった空間に光がこぼれ落ちて……。

《終わり》

《参考資料》
プラトン・著「ソクラテスの弁明」